

日本の履物

下駄

下駄（げた）

下駄の呼び名の成立は戦国時代と推測されています。下は地面を意味し、駄は履物を意味します。それ以前は「アシダ」と呼称していました。（漢字は様々な字があてられていました。）

日本人のアイテム



下駄（げた）は、日本の伝統的な履物で、足を乗せる木でできた板に、歯を台に差込む構造のものと、一本の木から削りぬいたものがあります。足の親指と人差し指の間に鼻緒を挟んで履きます。木製など硬質な素材でできた履物を下駄と呼び、草や樹皮、革などの柔らかい素材で作られたものを草履と分けられています。

かつて道路が舗装されていなかった時代には、雨などが降って道がぬかるむと、草履等では、ぬかるみに足が埋まってしまったが、高さのある下駄は、ぬかるみに埋まりにくかったため重宝されました。

大人の学習Ⅱ

Lesson6

靴の話Ⅳ

下駄の始まり



二世紀頃、水田か深田の耕作に使われた田下駄が始まりといわれています。

平安時代に入り下駄の前身足駄(あしだ)が民間からおこり、武士や婦女子にも履かれたようです。足駄は台の形は楕円形で、材質は杉、歯は銀杏歯(上から下へ反って広がっている)で一つの木材から削って作られていました。

鎌倉室町時代になるとそれまで限られた階級のものだった履物が、一般大衆にも普及しました。

日本独自の履物「足駄」が初めて世に現れてから、徳川時代まで木製履物は形の上で、殆ど変化しなかったのは、打ち続いた戦国乱世のためと考えられています。

江戸時代に入って、泰平が続くにつれてようやく形に変化し、駒下駄の現れた元禄以降においては、下駄の発達は最も著しいものがあって、世俗が遊惰となるにしたがって様々なものが現れました。

山下駄

山下駄 歯、台ともに一ツ木を削りぬいてつくったもの。江戸初期に樵夫がつくって江戸に売りに出たのでこの名がある。台が四角で、桐製が多かった。



駒下駄

雨天だけではなく晴天にも履ける日和下駄である。17世紀末期に登場し、広く男女の平装として用いられた。明治以前におけるもっとも一般的な下駄である。



小田原下駄

18世紀初頭、江戸の魚河岸で生れた。後の日和下駄、利久の原型。蟻さし歯を用いて歯の根が台にあらわれず、歯がすり減れば入れなおすことができるという点が利点。また鼻緒に革を用いたところに特色があり、全体的に上品な仕上げであった。



下駄の主な種類

助六下駄

歌舞伎十八番『助六』で主人公がはいている下駄。初演時(1713)に流行した。

台は桐の※1糸柱目で、小判形、※2朴の差し歯。



吉原下駄

吉原下駄 ほぼ山下駄と同じだが、杉製。鼻緒は竹皮。江戸初期から中期ごろ、吉原の遊び客が雨に降られたときに待合茶屋が貸した。



※1 木材の柱目が、糸のように細くて密なもの
※2:ほうのきの差し込み歯

参考文献：下駄の歴史

株式会社レイケアセンター
〒541-0054 大阪市中央区南本町 4-2-10 本町永和ビル 8 階
06-6245-7441
東京レイケアセンター
〒163-0809 東京都新宿区西新宿 2-4-1 新宿 NS ビル 9 階東
03-6279-0840

レイケアニュース編集室
今月のレイケアニュースはいかがでしたでしょうか。
ご意見ご感想をお寄せ下さい。
「レイケアニュース編集室」
Info@laycare.co.jp